

3-4					
主題	デイサービスにおける帰宅願望に寄り添う支援				
副題	降苑時間を視覚化する				
キーワード 1	帰宅願望	キーワード 2	視覚化	研究(実践)期間	6ヶ月

法人名・事業所名	社福) 育秀会 第3育秀苑デイサービスセンターレインボー
発表者(職種)	佐藤咲子(介護職員)
共同研究(実践)者	上村紀泰(管理者)、松下祐子(介護職員)

電 話	03-6904-0105	FAX	03-5968-8040
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	2013年(平成25年)練馬区土支田に開設した認知症対応型通所介護。法人理念「安心安全な暮らし作り」のもと、利用者が可能な限り自宅で自立した日常生活を送ることができるよう、日常生活上の支援や、生活機能向上のための機能訓練や口腔機能体操などを日帰りで提供している。ひとりひとりに合わせたアプローチに力を入れている。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

昨年11月、数名の利用者が職員に何度も帰りの時間を確認していた。その都度、降苑時間をお伝えするが、すぐに忘れてしまう。職員は何度も送迎バスの運行表を確認し、他の対応で忙しい時間帯では丁寧な対応が難しく、利用者を安心させてあげられないつらさがあった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

本研究では、認知症の利用者の帰宅願望とみられる言動とその背景にある不安を、情報を目で見て手元に残るものにすることで軽減できないか試みた。情報を物という形にすれば利用者が落ち着いて過ごせるようになるのではないかと。利用者の個性に合わせた支援によって安心して過ごして頂けるようにしたい。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ・【1期】特に降苑時間を確認することが多いM様と他3名の来苑日、来苑から降苑までの間の行動観察を実施。降苑時間を尋ねた時間帯・状況・回数・職員の対応を記録した。
- ・【2期】M様と他3名の行動に合わせた支援を実施。対象の利用者が降苑時間を尋ねてきた時や落ち着かない時に降苑時間を書いた「お帰り券」を渡し、それまでの流れと過ごし方を伝え、その後の行動を観察。(降苑時間の視覚化と職員による声掛けによって利用者の行動にどのような変化が生まれたかを見る。)
- ・【3期】M様に「お帰り券」の支援を一時中止し、行動を観察。(券の必要性を考える。)
- ・【4期】M様に「お帰り券」の支援を再開し、行動を観察。(物とコミュニケーションのどちらが有効か、「お帰り券」の支援継続のメリット・デメリットを考える。)
- ・【5期】デイルーム内ソファ横に「バス停」を設置。誰もが降苑時間を確認できる場にして行動観察。

※「お帰り券」は降苑時間を「〇時〇分」の記載と、それを時計の文字盤に長針短針を書き入れられるように作成し、パスケースに入れたもの。「バス停」は段ボール製で、降苑時間を掲示したもの。

※調査実施期間は下記のとおり。

- 【1 期】2023 年 12 月 6 日～12 月 9 日 【2 期】2023 年 12 月 11 日～12 月 28 日
【3 期】2024 年 1 月 4 日～1 月 18 日 【4 期】2024 年 1 月 19 日～4 月 17 日
【5 期】2024 年 4 月 29 日～（継続中）

《4. 取り組みの結果》

- ・ 【1 期】M様は昼食後、特に 15 時以降に降苑時間の確認回数が 3 回と増えるが、土曜日は送迎バスの 1 便目で降苑する上に顔なじみの利用者と会話していた為か確認行動は見られなかった。
- ・ 【2 期】M様が降苑時間を職員に確認してきた際、「お帰り券」を渡し、衣服の見えるところに着けてもらった。「お帰り券」を見ながら一緒に降苑時間を確認すると納得した様子だった。毎回分かるように説明し、安心してもらえる言葉かけを続けたところ、3 週目に入ると「お帰り券」を渡した後の確認行動は無かった（0 回）。
- ・ 【3 期】M様に「お帰り券」を一時中止して行動観察したところ、M様は再び頻繁に降苑時間を尋ねるようになった。M様には職員の声掛けだけでなく、確認できる物も必要に見えた。
- ・ 【4 期】M様に「お帰り券」の支援を再開したところ、落ち着いて過ごせる時間が増えた。しかし、次第に慣れが生じ、ポケットにしまった券を探す等の問題が発生。【2 期】のような効果が無くなり、4 月中旬に「お帰り券」を中止。職員は帰宅願望の強い利用者へのコミュニケーションを続けていた。
- ・ 【5 期】4 月末、デイルーム内のソファ横にバス停を設置した。多くの利用者が「お帰り券」なしでも自身で降苑時間を確認でき、バス停に集まって利用者同士や職員との会話を楽しめるようになった。

《5. 考察、まとめ》

M様は顔なじみの利用者と会話していると降苑時間を尋ねてこない。職員が利用者同士のコミュニケーションを促進する、又は職員が話し相手になることは、「お帰り券」より不安を軽減する効果がある。

また、確認できる情報、一貫した対応、その対応を繰り返すこと、コミュニケーションを促進することの 4 つの対応には、帰宅願望が消える訳ではないが精神的に落ち着く効果があった。「お帰り券」は個別ケアだが、バス停は複数人に情報を届けられるのでより多くの利用者の自立支援につながった。

今回の対応は字の読める、時計の文字盤が見える人、職員の働きかけを受け入れてくれる人のみ有効であり、視力や認知力の差があっても安心してもらえる方法や支援のタイミングは利用者ごとに検討する必要がある。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

鈴木みずえ（2017）「認知症の人の気持ちがよくわかる聞き方・話し方」池田書店

《8. 提案と発信》

「お帰り券」やバス停で降苑時間を伝えても利用者は忘れてしまうかも知れないが、目に見える情報とそこに生まれるコミュニケーションは利用者を安心させてあげられる可能性がある。